「いざという時」が来た

写真は中日新聞 7 月 3 日朝刊 1 面である。ノーベル物理学賞を受賞した赤崎勇先生が、「銃持てば戦争ありうる」「安保法案に絶対反対」と発言されている。自らの「戦争体験」からの発言に感動した。

2015年(平成27年)7月3日(金曜日)

銃持てば戦争ありうる

ノーベル賞 赤崎さん

「安保法案に絶対反対」

戦後70年

学徒動員から空襲体験へと話を進め、「戦争が自由奪った」と厳しく指摘されている。「今の高校生に当たる時期、勉強や読書など自分の好きなことに打ち込める自由をすべて奪われました。不戦は心からの願いです。」

もう一つは憲法学者である。朝日新聞 7 月 3 日「社説余滴」から。

黄色いプラスチックケースの上に乗り小雨降るなかマイクを握ったその人の頬は、心なしか紅潮していた。

「若い諸君の力強い声、いきいきした姿に接して、この国のいまと未来にもう一度、私は自信を持ちました」憲法学の重鎮、東京大名誉教授の樋口陽一さん、80 歳。先々週の金曜日の夜、10 代、20 代前半の大学生らが結成した「SEALDs」が主催する、安全保障関連法案への国会前抗議行動に参加した。街頭に立ったのは、44 年前、弁護士会のメンバーと仙台駅頭で裁判官の再任拒否に抗議して以来 2 度目だという。

2004 年に、取材でご自宅を訪ねた時のことを思い出す。前年にイラク戦争が開戦、戦後日本が問い直されている時に、何をどう考えるべきか、粋な和服姿で縦横に語ってくれた。ただ、時事問題に関して、紙面ではコメントしないという姿勢は一貫していた。「でも、いざという時が来たら、街頭に立って、ミカン箱の上にでも乗って、演説しますよ」「消費」されることを避け、発言の「重み」を保持しておきたいということだろうと理解した。一方で、まだ若く、血の気が多かった私は「それって、行動しない知識人の言い訳なんじゃない?」と疑った。そういう人はきっとずっと「まだまだ」と言い続けるに違いない、と。

だが、「いざという時」は来た。「不真面目な人たちによって、戦後日本が営々と築き上げてきたものが解体される瀬戸際にある」「それに甘んじることは、我々が辱められること。跳ね返しましょう」

(2015 年 7 月 9 日)